

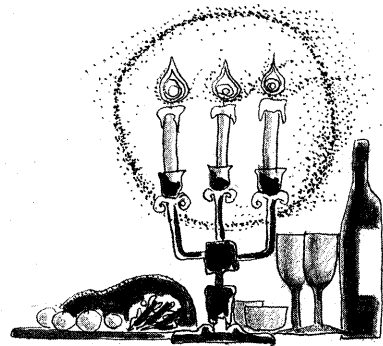
フランスのクリスマス

雨宮 裕子

静かに迎える年の暮れ

フランスに来て、何度目のクリスマスを迎えることになるのか。この国では、クリスマスはいつも静かにやって来る。

市場や、花屋の店先ぎに縦の木の鉢植えが並ぶのが十一月半ば。その頃になると、郵便受けに、連日プレゼント用品のカタログが投げ込まれる。ショーウィンドーは一際華やかに飾り立てられ、おもちゃ売場と、チョコレート売場には、とりどりの品物が山積みになされる。目



抜き通りには、ツリーや星を型どった豆ランプが取り付けられ、市庁舎前には、時計台に届く程の、豆ランプのツリーが組み立てられる。

でも、あのせわしない「ジングル・ベル」だけは、どこからも聞こえてこない。静かに着々と進められるクリスマス準備。ヨーロッパの冬は、太陽が遠のいた分だけ暗く寒い。早々に日が暮れ、豆ランプが一斉に点くと、町がぼっと温もるようだ。春を待ちこがれる気持ち、冬枯れの宵に、人工の花を咲かせるのか。熊たちの

ように永い眠りにつくこともできず、暖炉の前に寄り集まって冬越えをする人々。クリスマスに交わされるささやかな贈り物も、あるいはミサのあとのご馳走も、互いを鼓舞し合う、いじらしい演出なのか。

ふと、そんなことを考えてしまう程、冬の天は重い。ここブルターニュ地方では、十一月を別名「黒い月」と言う。黒い月は、十一月一日の「万聖節」に始まる。万聖節は、祖先や死者の冥福を祈る日である。この日から新年にかけて、死者の魂が地上を徘徊するとも言われた。祖先や聖なる者へ思いをよせ、身辺を清らかに整えて、家族で静かに祝うのが、フランスのクリスマスの習慣と言えよう。

幼稚園のクリスマス

息子は幼稚園の年少組に通っている。送り迎えは、私の役目である。

十一月のある朝、

「折り紙で何か飾りを作っていただけませんか。」



▲幼稚園年少組 クリスマスツリー

と、担任の先生に、急に切り出された。一瞬とまどう私に、

「無理には言いませんが。」
と、先生は顔を赤らめた。

この先生とは、息子の入園早々、ひと悶着あった。肩にかかる長い髪を金色に染めて、まるで人形のような風情で、子どもの世界に引き籠ってしまう。教室の中へ招き入れるのは子どもだけ。親は戸口ですげなく押し戻される。教室はどこもかしこも淡いピンク。窓に、パライソンの大きなリボンが飾られ、貼ってある絵もパステル調である。

開放的だった保育園とは、うって変わった雰囲気、私はすっかり戸惑ってしまった。あんな所で、息子は一日何をしているのか。疑問が危惧に変わり、それが先生の誤解と怒りをかうことになった。

生まれ、せっかくの依頼である。私はその晩からせつと花を折り、鳥を折り、十二月の初めには、花の薬玉と、たくさんのもビールを仕上げた。

クリスマスをどう盛り上げるかは、各担任の腕次第で

ある。親たちが協力的であれば、飾りつけも、一段と華やかになる。息子のクラスの櫛の木の前には、既にプレゼントの箱や人形が置かれ、子どもたちは、サンタクロースの貼り絵に勢を出していた。年長組の廊下には、東方の三博士や、サンタクロースの絵が貼られている。

息子のクラスでは、先生がクリスマスを、サンタが贈

◀ 幼稚園年長組 サンタの絵



り物を持って来る日と話したらしい。息子は、さっそくサンタの歌を自作した。

「サンタは、天から降りてくる。煙突から暖炉へ降りてくる。それから、プレゼントをくれる。それから…」

と歌いながら、ふと言ったものだ。

「日本のおじいちゃんの家はかわいそうだね。煙突がないから、サンタがこないね。」

幼稚園のクリスマス会は、冬休みに入る前に行われるので、十日程早い。この日は給食も特別メニューである。

キャロリーヌ風サラダ

羊のもののロースト、いんげんのソテー添え

みかん

クリスマスの丸太ケーキ

羊のもの丸焼きは、家庭でも一番のご馳走献立である。

そんなものを食べて、ゆっくり昼寝をした後で、今度



▲幼稚園年少組 クリスマス会

はクラスごとのクリスマス会が始まる。静かな音楽が流れる中、先生がテーブルにろうそくを点して回る。おやつは、ホットシヨコラとマドレーヌ。

息子には大満足の日であった。

会社のクリスマス

クリスマスのお祝いは、もう一つ別の所からもやって来る。会社か、社員の子どもたち用に、クリスマス会を開いてくれるのだ。対象は小学生ぐらいまでで、比較的新しい習慣とのことである。

去年はサーカスだった。今年はユゴーの「レ・ミゼラブル」をもとにした、バレエ劇だ。関連会社合同で、劇場を借り切ったのクリスマス会である。一時間そこそこの出し物だが、あきってしまったも、途中で帰る子は一人もない。みんな我慢して、おしまいまでじっと座っている。なにしろ、プレゼントは一番最後に控えているのだから。

プレゼントは、春先に回覧されるカタログから、親が

あらかじめ選んでおく。あんまり早く選ばされるので、親の方も何であったか忘れてしまい、去年は同じ積木を買ってしまった。

会場では劇が終わり、アルファベットの抽選に入った。選ばれた文字が頭に付く名前の子どもが、自分の贈り物をもらいに行けるのだ。贈り物には、チョコレートボンボンが一袋ずつ添えられる。普段は絶対にもらえないお菓子である。息子は顔を上気させて、袋をにぎりしめている。それを、どうごまかして取り上げたものか、この時期は、お菓子攻勢との戦いでもある。

我が家のクリスマス

クリスマスはいつも、夫の家族と、海辺の小さな村の別荘で迎える。我々が着く頃には、義母があらたに飾りつけを済ましておいてくれるので、子どもたちは、我先にツリーの前にかけつける。

ツリーには、赤や金、銀の玉、小箱や人形がゆれ、根元には大小のプレゼントが置かれている。その前に並ぶ

のは、たくさんのサントン人形で、キリストが生まれた馬小屋と、ガリラヤの町を再現している。サントンは、小さな聖者を意味する。粘土に彩色した人形で、小さいものは親指ほどの大きさである。ひざまずくマリアとジョゼフの間には、まどろみ 寐桶に寝る幼な子、その後には牛と馬がのぞいている。前には天使と羊飼い、後には祝福に向かうガリラヤの人々が配される。

義母はサントン人形を毎年少しずつ買い揃えて、今では何十体あることか。糸を紡ぐ女あり、粉をひく男あり。それを一体ずつ、真綿からていねいに取り出して、並べていくのだ。

我々は、その周りに飾る小道具集めを頼まれて、森へでかける。必要なのは、ふんわりした緑ごけ、古びた木の枝、松ぼっくり、小石、ひいらぎ。ひいらぎは、「ギ」と呼ばれる宿り木と組ませて、戸口のリースにも取り付ける。ギは一種の縁起もので、クリスマスから新年にかけて、戸口に吊しておく家が多い。

晚餐の用意は前日から始める。子どもたちが、近所の



▲海の別荘 暖炉の右手に飾られた丸太

農家へ兎を見に行っている間に、私は甘いおつまみを作ってしまう。くるみを割って、アーモンドペーストやプラムでくるみ、それに粉砂糖をまぶすのだ。義母は、ビュッシュ・ド・ノエルという、丸太型のケーキ作りにかかる。薄いスポンジを焼いて巻き、クリームで丸太に似せて作る、見た目も味も地味なケーキだ。でも、クリスマス晩は、これでなければならぬ。丸太には、ゲルマンの木の信仰に連なる、古い伝統があるからだ。もともとは、太く長い丸太を暖炉にくべ、それが長く燃え続けるのを、長寿の印として祝った。それが転じて、食べられる丸太となり、永遠の生命を体内に取り込む儀式となったのである。

義母は、暖炉用の丸太も、必ず一本特別に飾っておく。その丸太は、クリスマスの夜にくべられ、燃えた灰は、魔除けとして家の四隅にまかれる。

さて二十五日の夜。子どもたちは、「寝ない子の所には、サンタがこない」と義母に言いくるめられ、靴を片方ずつ枕もとに置いてしぶしぶベッドに入る。我々はミ

サの時間を待ちながら、フォワ・グラヤキャビアのカナッペで、軽くお腹を満たしておく。

村のミサは九時半に始まる。近隣からも人が集まるので、教会の中は、たちまち一杯になる。司祭はまず、香炉をふって堂内を清めた。それから祭壇に上ると、我々をゆっくり見渡して、聖書の一節を語りだした…。

海鳴りと、満天の星に包まれた帰り路、澄んだ心に浮かぶのは、待ちうけるご馳走の数々。生ガキ、七面鳥のロースト、丸太ケーキ、トリュッフ・チョコ…。まずはシャンパンを抜いて乾杯から。

冬の夜長、手作りの晚餐がゆっくり始まる。

(フランス在住)